カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852－8113
長崎市上野町10－34
カトリックセンター内
TEL 095－843－3869
FAX 095－843－3417
振替口座 01880－5－2699

発行人
大水文隆

印刷所
株式会社 藤木博英社
〒850－0852
長崎市万屋町5－13
TEL 095－821－2146
FAX 095－821－2148

わたしの願い あなたと同じ世界平和

被爆70年の日 カントゥ司教が呼び掛け
武力によらない平和を

被爆70年を迎えた8月9日（日）、午後6時から浦上教会で平和祈願祭（教区・同実行委員会主催）が開催された。日本の信徒発見150周年を祝う今年、浦上キリシタンの信仰告白に思いを重ねるために選ばれたテーマは、「わたしの願い あなたと同じ世界平和」。

ミサに先立ち、スペイン・ビルバオ教区から寄贈された「ゲルニカの被爆マリア像」と「浦上の被爆マリア像」が、折り鶴を手にした子どもたちと共に入堂、祭壇横に奉納された。

高見三明大司教主司式によるミサでは、ジョセフ・チェノットゥ大司教（駐日教皇大使）、マリオ・イセタ司教（ビルバオ教区）、オスカー・カントゥ司教（ラスクルーセス教区・米国カトリック司教協議会国際正義と平和委員会委員長）、宮原良治司教（福岡教区）、浜口末男司教（大分教区）、肥塚俊司師（広島教区管理者）の他、カナダのスルピス司祭会会員を含む約60人の司祭団が祭壇を囲んだ。

「原爆と戦争で亡くなられた方々のために祈ると共に、私たちの間から平和が実現するように祈りましょう」との高見大司教の招きに応え、教会を埋め尽くした約1200人の信者たちは、同じ思いを〝ムネ〟に、祈りをささげた。

説教師を務めたカントゥ司教は、「皆さんはすべて、核兵器のない世界を託され、ここに集められた、平和を実現する人々、神の子です」と呼び掛けながら、「70年前の忌まわしい状況の中で命を失った人々と、苦しい記憶の中で生きている人々」に思いを馳せた。「わたしは、何世紀もの間教会を支えた人々の信仰に奮い立たされています。日本の教会と殉教者たち、そして広島と長崎の人々に対して畏敬の念を抱いています。広島と長崎の人々は、世界に対して、暴力と戦争を放棄し平和を追求するようにと、一生懸命訴えてきたからです」

また、広島と長崎の悲劇を二度と繰り返すことがないよう求めた歴代の教皇の発言と、「（米国が）1945年の原子爆弾投下に対する深い悲しみを表明することができるような世論の環境」をつくることを約束した1983年の米国司教団の司牧書簡を思い起こしながら、「アメリカ合衆国の司教団は、ここで起こった悲劇と向き合い、日本の教会と連帯して、地球規模の核不拡散と軍備縮小を共に弁護します」と語った。

今年2月に発表された日本司教団の「戦後70年司教団メッセージ『平和を実現する人は幸い――今こそ武力によらない平和を』」にも言及し、平和を実現するために求められていることがここに述べられていると指摘。この世にあって希望と平和の使者となることができるよう、「主が日本の教会とアメリカ合衆国の教会を、連帯と委託の精神で強めてくださいますように」との祈りで説教を結んだ。

拝領祈願の後、チェノットゥ大司教は「何よりも平和は神の賜物。わたしたちが神に向かってこそ、平和の道具となることができます」、イセタ司教は「体の一部が苦しめば全体が苦しみます。（ビルバオ教区の）ゲルニカの共同体もこのミサに合わせて、長崎と広島の人々のために祈っています」と、来賓を代表してあいさつした。

ミサ後、教会前広場で祝福された火をたいまつにともし、午後8時、浦上の被爆マリア像と共に平和公園へ向けて行列を開始。ロザリオの祈りと聖歌が響く中、平和を願う光の帯が浦上の丘を下っていった。

公園に到着後、被爆マリア像は前方に据えられ、みことばの祭儀へと続いた。そして、武力によらない、愛による平和の実現を願って『広島・長崎キリスト者平和アピール』が藤井清邦牧師（古町教会・長崎キリスト教協議会議長）と髙見大司教によって読み上げられた（全文は教区ホームページに掲載）。最後にアシジの聖フランシスコの『平和を求める祈り』を皆で唱え、平和を築く決意を新たにした。

千葉から来た大学1年の男子学生は、「長崎被爆70周年ということで、朝から長崎市主催の平和祈念式典に参加し、その流れでこの平和祈願祭に参加しました。今、平和について思うことを、日本の同世代の若者と共有できるようにしたい」と語った。また京都から巡礼で訪れた中学2年の女子生徒は、「原爆の悲惨さ、むごさを初めて知りました。私たち中学生の思いは微力だけど、一人一人が平和について考えることは非常に大切なことだと思う」と感想を述べた。

ゲルニカの被爆マリア像を受贈

8月9日（日）平和祈願祭のミサの前に、2体の〝被爆マリア像〟と、各小教区で平和を祈りながら折られた折り鶴が奉納された（写真）。2体は、被爆した浦上教会のマリア像と、1930年代に無差別爆撃で破壊され頭部のみが残ったスペイン・ゲルニカのマリア像。

この日、朝7時半からの浦上教会のミサで、ゲルニカのマリア像（複製）が長崎教区へ受け渡される贈呈式が行われた。寄贈したのはゲルニカが位置するビルバオ教区のマリオ・イセタ司教で、信徒2人と一緒に来崎。2010年に髙見三明大司教ら平和巡礼団が、浦上教会の被爆マリア像と共にゲルニカを訪れたことを機に交流が生まれ、原爆投下から70年の今年、マリア像が寄贈されることになった。

髙見大司教から紹介を受けたイセタ司教は、ビルバオ教区とゲルニカのカトリック共同体を代表してあいさつした。

「広島と長崎で起こった悲劇は、人類の歴史に大きな傷跡、しるしを残しました。ゲルニカの町も爆撃当時ほぼ破壊されましたが、出来事を体験した人が何人も生き残っています。

聖母マリア様とおんひとり子に、この難しい時代を乗り越えることができるようにお祈りしたいと思います。5年前に髙見大司教様が浦上の被爆マリア像を持って訪ねてくださったことにあらためて感謝し、また、皆さんに感謝いたします」

聖母平和祈願祭で記念劇
〝そして サンタ・マリアがいた〟

聖母被昇天の祭日8月15日（土）、佐世保地区評議会主催の聖母平和祈願祭がアルカスSASEBOで開催された。今年はミサに代えて、日本の信徒発見150周年記念劇『そして サンタ・マリアがいた――キリシタン復活物語』（監督・脚本 古巣 馨）が上演され、約1500人が鑑賞した。

この劇は、潜伏時代の浦上キリシタンの日常や大浦天主堂での神父と信徒との奇跡的な出会いを描いたもので、今年3月に長崎市内で上演され好評を博した。今回、再演を希望する声が寄せられ実現。長崎中・佐世保地区の司祭・信徒ら約40人が出演し、スタッフを含め総勢70人余が携わった。約2時間におよぶ舞台は、観客からの惜しみない拍手の中で幕を下ろした。

長崎と佐世保での公演を裏方として支えたスタッフの一人は、「戦後70年のこの日に平和祈願祭での劇を演じるということで、平和を願う気持ちを持ちながらの参加となりました。道具係は、2時間の中で、11場面の道具を次々にセット・撤収を行います。それは、役者が役を演じるように〝道具係の役を演じる〟と言えます。長崎公演よりグレードアップした劇となり、更に充実感を味わうことができました」と語った。

宗教を超えた平和への願い
宗教者と市民ら、爆心地で祈る

8月8日（土）19時から長崎県宗教者懇話会主催の第43回原爆殉難者慰霊祭が、長崎市松山町の原爆落下中心地公園で行われた。戦争と原爆の犠牲者のため、また世界平和を願って、キリスト教、仏教、神道など諸宗教者や市民らが集まり祈った。

まず、トルコ・イスラームの平和の祈りと舞がささげられ、雅楽奏楽に続いて開式、賛歌合唱、献水、平和の誓いの宣言などがあった。

慰霊の言葉は、県宗教者懇話会会長の野下千年師らが述べた。野下師は、被爆70年にあたり被爆都市の宗教者・市民として、神仏の助けを祈りながら、さらなる平和の貢献に努める決意を、犠牲者の御霊に誓い慰霊の言葉とする、と表した。

また駐日教皇大使ジョセフ・チェノットゥ大司教は、「人類と和解と平和に対する私たちの過ち、人間の尊厳に対する私たちの軽蔑をゆるしてくださるよう、謹んでお願いいたします。犠牲者の遺族を慰め、現代のすべての人々、特に神仏を信じる人々に和解と正義と平和、そして愛の心を注いでください」と語った。

最後は参加者全員で「長崎の祈り」（作詞・作曲 野下千年）を合唱し、宗教を超えた祈りの集いは閉会した。

ほしかげ

教区民の皆さん、「教区シノドスのための祈り」および「教区シノドスの実りを願う祈り」を唱えてくださり感謝申し上げます。皆さまの祈りが決して無駄ではないことを、数字でたとえてみたいと思います▲これらの祈り1回が、お金のたとえで恐縮ですが「10円」だとしましょう。長崎教区に信者が6万人いるとして、25％の信者が日曜日のミサに参加してこの祈りを唱えた場合、日曜日1回で合計15万円です。5％の信者は平日にもミサに参加しているでしょう。平日の祈り全体を日曜日1回分として15万円、すると1週間で30万円です。これが3年前から継続していると仮定すると4500万円です▲ひょっとすると、厳しい査定で値踏みされ、1回の祈りの価値が「5円」に値切られるかもしれません。それでも2250万円です。教区民皆さまの祈りは、教区シノドスの成功のために支払われた尊い血税です。「教区シノドス提言」に盛り込まれた内容を一つ残らず遂行し、無駄にはいたしません▲一つ心配があります。それは、「提言」を本当によく読み、「この道しかない」と腹をくくって進もうという気構えがあるか、ということです。弱い立場にある人々に寄り添って生きていこうという決断がなし崩しになれば、最低でも2000万円の価値がある教区民お一人お一人の祈りは無駄になってしまいます。（K・N）

聖母マリアの思いは？

聖アウグスチノ修道会司祭　山口 正美

聖母マリアの執り成し

信徒発見の出来事（1865年3月17日）は、皆さんもよくご存知の恵み深い歴史的事実です。浦上の婦人たち十数名の勇気ある行動は、聖霊の導きによるものとして、心から感謝と賛美をささげたいと思います。また、婦人たちを通して信仰を目覚めさせたマリア様の参与は、いつも大きな霊的成果を生み、人々を神へと導く特別のはからいであったことが読みとれます。

ところで、70年前に原爆によって長崎の町が焼け野原になったとき、不思議にも焼失を免れた母の手帳「公教信者要簿」が今、私の手元にあります。これは信者家庭の籍として使用され、今では我が家の過去を観るのには大変貴重な記録になってしまいました。

「信徒発見の聖母」の心は、当時のキリシタンとの関係で多大なインパクトを残したばかりではなく、先祖からいただいた信仰がマリア様の歴史的介入によって呼び起こされたものでもあります。それで、ここで読みとれる家族のわずかな歴史に焦点をあてて考えてみたいと思います。

山口トラが結んだ出会い

そもそも事の始めは、どうして父と母が地理的に離れているのに結ばれたのでしょうか。記録によれば、母はまず明治34（1901）年、熊本の非キリスト者の農家に生まれ、それから明治から大正にかけて、家族と共に炭鉱で賑わう大牟田に移住しました。しかも旧・大牟田教会のすぐ隣に住んでいたようです。これが何かの縁になったのか定かではありませんが、当時は佐賀、久留米、大牟田教会に巡回してまわるパリ外国宣教会の神父様や司教様たちがいて、教会来訪のときにはいつも、洗礼や初聖体、堅信などが多数授けられておりました。

母は11歳のとき、家族共にソーレ神父様から洗礼を、リーレ神父様から初聖体を受け、大正12（1923）年に旧・浦上教会で最後の外国人主任司祭ヒューゼ神父様によって結婚式を挙げてもらっています。その後、姉夫婦たちはそのまま大牟田に残り、祖父母たちの死亡や葬式を見守ったようです。当時なぜ家族が一団となって洗礼を受けたかは明白ではないのですが、それらの代母として名前が残っている父方の祖母、「山口トラ」という方の存在が大きかったようです。

記録から察するところ、この「山口トラ」は父方の祖母で、61歳のときに母の洗礼の代母を務め、八代の信愛のシスターたちの博愛病院で86歳で亡くなるまで、他の人の代母をも務めていました。その後、教会の旧墓地に埋葬されたと書いてあります。それで数年前、長崎市役所の戸籍課や熊本市役所、八代教会などに行って調べてみると、「山口トラ」という方の墓石を見つけることができました。八代教会の一番古い墓地の雑木林の中に、誰も訪れた形跡もない、しかし名前がはっきり分かる十字架の墓が建っていました。それを見たとき、彼女が生きていた時代のキリシタンの姿を少しでも垣間見た喜びを感じたところです。そしていつかは彼女の遺骨を故郷の長崎に持ち帰ることができればと、心の中で思いました。

「山口トラ」という方は浦上四番崩れのとき、両親と姉夫婦らと共に鹿児島に配流された記録が残っていて、当時の薩摩藩のキリシタンに対する取り扱いが緩やかであったがために生き残り、そのまま現地にとどまったようです。86歳で亡くなるまで、浦上、八代教会、熊本、大牟田などと行き来しているうちに、母と父の見合いが実現したのではないかと推測しております。

終戦までは、大牟田には神学校、幼稚園、不知火学園とでき、戦後には800人の信者がいたとも聞いています。

原爆の日

2人は大正12（1923）年に旧・浦上教会で式を挙げ、教会のすぐ下の家に住んでいました。当時母は22歳、父は28歳。5男4女の大所帯でした。父は明治28（1895）年、ちょうど旧・浦上教会の本体建設工事が始まった年に生まれ、江平に住んでいました。そのとき、庄屋屋敷の仮聖堂で受洗し、大工、職業軍人として勤めました。福岡の故深堀仙右衛門教区長とは、学生時代のテニス仲間だったようです。終戦のときまで大橋の三菱兵器工場で仕事をし、戦後、永井先生の家を建てたとも聞いています。

母は口癖に「戦争のためには子どもがいるんだよ」と冗談に言って、私が生まれたのは想定外だと聞かされたのにはがっかりしました。

このときの子どもたちは一本木に疎開するか、学徒兵で駆り出されるかでした。あの日の朝は特にいやな予感を感じたと、母は言っていました。多分「被爆のマリア」のささやきであったかもしれません。8月9日は快晴で暑く、朝早くから空襲警報がありました。母は、こんな時間に警報とは、と思いながらも「もしかしたら」といういやな予感を感じたそうです。それで子どもたちと防空壕には入らず、父方の親戚の家の一本木に子どもたち皆を連れて疎開することにしました。それから数時間後たっても何も起こらなかったので、2人の子どもを先に帰して家の窓や居間の戸を閉めていたときに、突然ものすごい熱と閃光、暴風が一瞬にして家を襲い、残っていた子どもたちも床に叩きつけられたと言っていました。

幸いにも火災からは免れたものの、あの不思議な予感がなかったならば子どもたち皆亡くなっていたと言って、毎日唱えるロザリオの中でいつも感謝していました。

家族のその後

原爆投下後3～4日してから大橋の工場で働いていた父が大けがをして帰宅。兄たちは大学病院で学徒兵として働いており、被爆のときには瓦礫の下敷きになりながら助け出され、あとの2人の姉たちは下山の途中爆死していたのが数日後発見されました。私はまだお腹の中でした。浦上教会のわき祭壇にできた被爆マリアの祭壇の壁には、それぞれの名前が書かれていて、多くの人たちが祈ってくださることに今も感謝しております。父は60歳で昭和31（1956）年に岐阜県で死亡。母は昭和61（1986）年85歳で三ツ山の原爆ホームで死亡。このときもう一つの出来事に出会いました。それは葬式のとき、遺族でロザリオを唱えているとシスターが遺体のそばに置いてくれたマリア様が凄くにこやかな顔をしていたのを今でも鮮明に思い出します。それはちょうど、聖週間の聖土曜日の日だったからです。父母の墓は山口の先祖の墓、経の峰のキリシタン墓地に埋葬されています。

最後に、長崎教会群の世界遺産の登録のための運動があります。大牟田でも「明治日本の産業革命遺産」のための運動が盛んになっています（＊7月5日に世界文化遺産への登録が決定）。この炭鉱の建物が大牟田の実家のそばにあるのも、不思議な縁のようです。

先日、大牟田の墓に眠る母方の遺骨を移動したときに、その隣のスペースに昭和32（1957）年に三池港で病死したギリシア船籍の船員が埋葬されているのが分かり、船員司牧の全国担当者として、「山口トラ」と一緒に生まれ故郷に送還できればと心の中で祈っている次第です。

三浦町で合同ミサ

英語コミュニティーと交流

通常の主日ミサに加え毎日曜日13時から英語ミサがささげられている三浦町教会（主任 中村倫明師）で6月28日（日）、フィリピンやアメリカなど英語コミュニティーの方々と三浦町教会信者との合同ミサが行われた。

このミサは、「同じ教会に集う信者同士一緒にミサを」との声が上がったことから昨年5月に初めて実施され、今年が2回目。今回は同教会堂名である「イエスの聖心」と主任司祭の霊名であるペトロの祝いを合わせて行う会として、ミサと祝賀会があった。

ミサには、英語コミュニティーの方々約80人を含め300人を超える信者が集まった。ミサ後は教会ルルド前の庭で祝賀会。準備された料理の他、英語コミュニティーの方々も料理を持ち寄り、皆多彩な料理に舌鼓を打ち交流を深めた。いたる所で記念撮影する様子も見られた。

三浦町教会の英語ミサは2012年に始まり、参加者は年々増加傾向にある。現在、教区内で英語ミサがささげられている教会は、諫早（第1日曜14時）、西坂の聖フィリッポ（毎日曜12時30分）、三浦町の3つ。

平和を願うコンサート

出演者の一致が平和を語る

8月2日（日）「NAGASAKI平和を願うコンサート」が城山教会で開催され、100人余の出演者を含む約250人が、音楽を通して平和への思いを分かち合った。教区平和推進委員会、長崎平和を願うコンサート実行委員会主催。

第1部は島原高校管弦楽部とEnsemble Andante他による管弦楽。第2部は深堀教会聖歌隊、コール愛、男声合唱団グランデュークコール、長崎センター合唱団がそれぞれに合唱。第3部は朗読を織り交ぜて、全出演者による平和讃歌〝A Peace Song in Praise〟（指揮・構成・作曲 瀬尾照明）が演奏された。最後は全員で『平和の大工』（作詞・作曲 山本きくよ）を大合唱し終了した。コンサートに先立っては、永井 隆博士の「この子を残して」の紙芝居もスクリーンに映し出され、皆で鑑賞した。

参加者の一人は、「多くの人が協力して演奏する姿がとても温かく、音が心に響いた。平和は一致から始まるとあらためて感じた」と語っていた。

砕石・栗石・港湾用捨石一式生産販売
たつみ産業株式会社
西田商事株式会社
代表取締役 ミカエル 西田 剛
本社 〒857-1166 佐世保市木風町1468番地
TEL（0956）31－8268

交通誘導警備　常駐警備　イベント警備
（有）小田警備保障
警備員募集！
電話 095-856-6524　FAX 095-856-6523
長崎市横尾3丁目31-15　代表取締役 パウロ　小田　睦

✝主の平安
株式会社 五島式典社（斎場）五島中央会館 奈留会館
代表取締役　ヨゼフ　浦　昭
24時間営業
五島市上大津町1385番地1　TEL（0959）74－5551　FAX（0959）74－5552
五島市奈留町浦1899－1　TEL（0959）64－3101　FAX（0959）64－3102

ご先祖に心より感謝を・・・
材石治明
長崎本店　長崎市城栄町13-1　電話（095）846-3598
大村店　大村市民霊園内　電話（0957）50-3008

日本の信徒発見150周年記念事業 寄付の御礼

長崎教区の皆様へ

去る3月17日に執り行われました日本の信徒発見150周年記念行事および関連行事に多大なご協力をいただき、その上、時機を失した寄付願いにもかかわらず、寛大なご理解とご支援を賜りましてまことにありがとうございました。心より感謝を申し上げます。

なお、この歴史的な記念を有意義なものにするためにも、教区シノドス提言を皆さんと共に堅実に実行してまいりたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

総額 17,070,400円（7/31現在）

長崎教区評議会　会長
大司教　ヨセフ　髙見　三明

長崎から54人が参加
広島ピース・スタディー
深堀 柱さん、分科会で被爆証言

教区平和推進委員会（岩村知彦委員長）は8月5日（水）～6日（木）に広島ピース・スタディーを実施し、教区内の教会から集まった中高生26人と高見三明大司教、2人の司祭を含む総勢54人が参加した。

5日早朝、バスで長崎を出発。昼頃広島市内に到着し平和記念資料館へ。戦後70年という節目のためか、館内は世界各地から集まったと思われる訪問者でいっぱいだった。その後、カテドラル幟町教会で広島教区平和行事の一つ、「分科会」にそれぞれ参加。広島・長崎の被爆証言、沖縄・高江をテーマにした話などを聞いた。夕方はカトリックと聖公会の合同プログラム「祈りの集い」。平和公園の原爆供養塔前から幟町教会を目指して歌いながら行進した（写真）。教会到着後は、日本カトリック司教協議会、WCC（世界教会協議会）、日本聖公会主教会による「平和のための祈りの集い」へと続いた。

この日の「分科会」では、城山教会所属の深堀柱さん（85）が長崎の被爆証言をした。深堀さんは、被爆当時の様子や戦後の状況、海外での被爆証言、平和に向けた長崎の取り組み、また、自身が浦上の被爆マリア像を描き続けていることなどについて、関連画像をスクリーンに映しながら語った。被爆証言を初めて聞いたという長崎の中学生は、「僕は原爆のことを普段あまり考えたことがなかったけれど、原爆をうけた人たちはそのことを抱えながら生きているんだなと思いました」と話していた。

6日の朝8時からは、原爆・すべての戦争犠牲者追悼ミサが同教会で行われ、前田万葉大阪大司教の主司式、12人の日本の司教、スペイン・ビルバオ教区のマリオ・イセタ司教、米国ラスクルーセス教区のオスカー・カントゥ司教、30人余の司祭団の共同司式のもと、多くの参加者が祈りをささげた。ミサ後、米国の司教らによるピースメッセージを聞き、長崎の一行は教会での日程を終えた。広島を離れる際、市内にあるフランシスコ遠山甚太郎らの殉教地を訪ねて祈り、帰路に就いた。

ピース・スタディーに参加した中高生は、「いろんな人が平和を願っていると感じた」「同じ被爆地でも、広島は長崎とはまた違う雰囲気。勉強になった」「自分から情報をとっていき、平和についてどんどん学んでいきたい」と感想を話した。

説教を黙想ノートにメモ

黙想ノート――私の使い方②
西町教会　長野宏樹

ある司祭から「私たちは祈りを通して自分の願いを神さまに出していますが、神さまの私たちへの願いは聖書から汲み取ることができるのですよ。だから、日々祈りを通して神さまにお願いしているように、毎日聖書をよく読み、そこから神さまの願い・メッセージを汲み取りなさい」と諭されたことがあります。また啓示憲章で、「天における父は聖書の中で深い愛情をもって自分の子らと出会い、彼らとことばを交わすからである。他方、神のことばには非常に大きな力と能力が内在しているので、霊魂にとっては糧、霊的生活にとっては純粋な尽きない泉となって現れる」（21）と教会は教えています。

ミサに参加するとき私は数人の方と車に乗り合わせ、一週間の出来事について話しながら行きます。帰りはみことばの祭儀について話しながら帰路に就きます。ところが、意外と今日のみことばがどんなものであり、どのような説教であったか全く記憶に残っていない現実に戸惑っていますし、年を取るとはこのようなものかとがっかりしたりします。

数年前から「黙想ノート」が発行され、それを使って少しでもみことばを深く味わおうとしていますが、自分だけの読み込みでは内容が偏り、深まりません。それに対し、他の方の読み方に触れると、なんと幅広くよく味わい深い読み方ができるものだと感心することがしばしばです。

しかし、残念なことにいくら素晴らしい話でも、記憶に残らない現実をなんとかできないものかと考えていたとき、「黙想ノート」の使い方の一つとして、「説教の中でこれと思ったことをメモしてみませんか」というアドバイスがありました。それから主日のミサに参加するときは、黙想ノートを持参し説教をメモするようにしています。

先日の福音は、「使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した」（マルコ6・30）という言葉から始まる箇所でした。説教師はこのことを取り上げ、「皆さんもミサに来られたとき、1週間の出来事を残らずイエスさまに報告していますか」というものであり、早速黙想ノートに書き留めました。

70年の想いを今に
城山で平和を祈る音楽朗読会

8月1日（土）14時から城山教会で、「平和を祈る音楽朗読会 子どもたちと共に 第8回マリアの丘から愛をこめて――70年の想いを今に繋げて」が開かれた。主催は元TBSアナウンサーの今井登茂子氏が主宰する朗読グループ「水の会」。

出演は、東京と長崎の「水の会」、子ども朗読グループ「空」、立教大学グリークラブOB・OG混声合唱団トリニティコール、聖マリア学院音楽クラブSCORE&OGら総勢約70人。平和への祈りを込め、『昭和の遺書』や今井登茂子作『赤とんぼ』の朗読、『大地讃頌』の合唱などが披露され、皆静かに聴き入っていた。

SCOREの卒業生で、第1回開催からほぼ毎年出演しているという岩本夏奈さん（ロンドン在住・高校3年）は、「（活動を通して）平和や戦争について考えさせられる機会をもらい、考えが深まったように思います。卒業してもSCOREはすごく落ち着ける心安らぐ場所。海外にいても日本に帰ってきても、長崎のことについて話すときにはいろいろと伝えていきたいです」と語った。

音楽朗読会は、翌8月2日にも国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で開催された。

大槌ボランティア募集

- ●10月15日(木)～21日(水)（9／30締切）
- ●11月12日(木)～18日(水)（10／28締切）
- ●12月10日(木)～16日(水)（11／25締切）
- ●1月14日(木)～20日(水)（12／23締切）

申し込みは所属小教区へ。問い合わせは教区本部事務局（松尾）まで。
FAX TEL 095-842-4460　095-842-4450

光と音で歴史をたどる
浦上天主堂再現プロジェクト

夜空の下、旧浦上天主堂の姿が浦上の地に浮かび上がる――。原爆投下から70年、信徒発見から150年にあたる今年、8月6日(木)と8日(土)に各日4回、計8回にわたって「浦上天主堂再現プロジェクト」（同実行委員会主催）が実施された。

これは、被爆3世や長崎市民が「戦争体験者と戦争を知らない世代との交流のきっかけをつくり、継承問題に寄与することを目指して」企画したもの。プロジェクションマッピングという映像手法を用いて、浦上教会壁面に原爆で破壊された浦上天主堂を再現。約10分間の映像の中では、キリシタン迫害と信徒発見（写真）、信仰の自由、天主堂の創建、原爆による倒壊とその後の再建、復興などが光と音で表現された。

会場となった浦上教会敷地と天主公園には2日間で延べ5000人以上が集まり、投影後に自然と拍手が沸き起こるなど、感動を共有している様子だった。

実行委員長の一人でカトリック信徒の深堀暢師さん（滑石教会所属、30歳）は、「浦上のキリシタンの歴史をはじめ浦上天主堂の歩みを背景に、原爆・戦争について考えるきっかけを、多くの方に与えることができていれば幸いです」と語っていた。

中高生・青年がキャンプで交流

8月1～2日、木鉢教会小瀬戸集会所で、北川大介神父様（サレジオ修道会）の指導のもと、信徒発見150周年記念企画・中高生キャンプ「One Fifty Camp」を開催、12人が参加しました。

教区の青年有志が主催したこのイベントは、青年と中高生・中高生同士が交流を持つこと、そして先祖から受け継いだ信仰について、あらためて考えてもらうことを目的としていました。

神ノ島教会へ徒歩巡礼に行った時には、みんなが和気あいあいと会話をしながら歩いていました。光の集いでは、1日目の出来事を振り返り、静かに祈っていました。

2日目の分かち合いでは、恥ずかしがりながらも、普段思っていることや感想を話してくれるようになりました。それ以外にも、レクリエーションやバーベキューなど、みんな楽しんでくれていました。

このキャンプを通して感じたことをこれからの信仰生活に役立ててもらえればうれしく思います。青年の方でも不慣れなため、行き届かない点もありましたが、またこのようなイベントをやりたいと思います。

八幡町教会　田川雄三

訂正

〈長崎カトリック神学院〉
教区報8月号8面「感謝・香典返し」の欄に冨岡様と記載していましたが、正しくは「冨永勝彦様（浦上）故マリア冨永アキミ様」でした。訂正し、お詫び申し上げます。

お知らせ

〈教区本部事務局〉
日本キリシタン歴史博物館（仮称）の担当者として、高田征一氏を7月1日付で採用しました。

新刊良書

★村上茂の生涯
著者＝ムンシ・ロジェ・ヴァンジラ（神言修道会）。かくれキリシタンの帳方として活躍した故・村上茂氏の生涯を紹介。聖母の騎士社、税別500円。

創立40周年を祝う
長崎カトリック合唱団

長崎カトリック合唱団は1974（昭和49）年5月、橋本 勲神父様と長崎の聖歌向上を求める信徒たちによって立ち上げられた。そして今年1年遅れで40周年を感謝し、6月21日（日）中町教会で記念ミサをささげた。

橋本 勲神父様の主司式、野下千年神父様と平本義和神父様の共同司式で、信徒席には団員（下窄英知神父様を含め）とその家族・支持者に加え、偶然巡礼に来たフィリピンの若者なども共に祈った。

創立以来、典礼聖歌の普及と教会儀式への協力および音楽を通じて社会奉仕を目的に活動を続けて、教区行事の典礼奉仕、熊本・恵楓園など各種施設訪問、各種音楽イベントへの出演など多くの要請に応えてきた。

平本神父様は父の日にちなんで説教された。「イエス様は嵐の中で恐れる弟子たちを諭しながら、父なる神と私を信じなさいと言われました。父親のようにさりげなく私たちを導いてくださるイエス様の深い思慮に気づいて、信頼して頑張りましょう」

確かに当合唱団の歩みも創立以来、順風ではなく、幾多の試練と危機があった。しかし支援者の多くの祈りと活動の中で醸成された喜びで乗り越えてきた。

これからも多くの要請に応えるべく、毎週（金曜の夜7時）の練習に励んでいく決意を新たにした。

〈合唱団のホームページ〉
http://nagasakicatholicchoir.web.fc2.com

城山教会　林田健治

召命フェスティバル

召命の発見をテーマに雲仙で開催

8月3日（月）雲仙メモリアルホールにおいて、〝召命の発見〟をテーマに召命フェスティバルが行われた。教区召命委員会（岡 秋美委員長）の主催で2年に一度行われる召命フェスティバルは今回で7回目。教区内から250人余の小学生をはじめ、引率の信徒、修道者、司祭あわせて約350人が参加した。

実行委員長の野濱達也師（早岐小教区）はあいさつの中で「今日はいろんな発見をしてほしい。将来の自分の召命の発見が、神父様やシスターであったら私たちはうれしく思います」と子どもたちに話した。

はじめに行われた召命祈願ミサでは、子どもたちが朗読・オルガン・共同祈願などの典礼奉仕を担当した。また事前に各小教区で用意してきた献金がささげられた。午後には滑石教会の子どもたちによる朗読劇、その後雲仙地獄を巡礼し、会場に戻ってからは司祭・シスターによる劇・バンド演奏などの出し物が披露され、会場を沸かせた。

最後に、佐世保地区の各小教区が作成した教会紹介パネルを見てクイズに答えるミニ巡礼などのレクリエーションが行われ、参加した子どもたちは口々に「とても楽しかった」と話していた。

上五島で子どもの集い

召命は「神の家族」の絆から

7月19日（日）～20日（月）の2日間、小学生女子を対象とした「上五島地区子どもの集い」を、お告げのマリア修道会の協力のもと、青方教会で行いました。

子どもたちが自分の教会以外にもたくさんの仲間がいることを知り、神の家族として仲良くなってほしいということ、また召命を考えるきっかけとなればとの思いから、この集いを企画しました。

41人（4～6年生は青方教会に宿泊）が参加し、シスターの指導を受けながら、長崎から手伝いに来た6人の志願者が子どもたちの親睦を深めるためのゲームをしたり、自分たちでオリジナルのロザリオや栞を作ったりして楽しみました。

2日目は、お告げのマリアの志願者の生活を紹介するビデオを見たり、仲良くなった人たちとアドレス交換をしたりしました。また、子どもたちと一緒に参加した保護者の方々には、召命についての話を聞いていただき、召命への理解を深めてもらいました。

最後に、6人の司祭で召命祈願ミサを行いました。この子どもの集いを通して、1人でも多くの子どもたちの中に召命の種が芽生え、育っていくことを願っています。

上五島地区
信仰教育委員会
中濱繁喜

子どもスポーツ大会

長崎と佐世保で熱戦繰り広げる

7月29日（水）、長崎3地区の「長崎地区子どもスポーツ大会」がシーハット大村で開催された。種目はドッヂビー。主催は長崎教区の有志の若手司祭団で結成された「子供の会」から成る実行委員会。

18小教区22チーム約400人の小学生たちが練習の成果を発揮し、熱戦が繰り広げられた。今回は例年よりも早い時期の開催だったため、練習時間が少なかったことは否めなかったが、各小教区で工夫して少ない時間を有効に使って本大会に臨んでいた。結果は次の通り。優勝 浦上A、準優勝 木鉢・飽ノ浦B、3位 滑石B。

★★★

8月2日（日）10時から総合グラウンド体育館で開催された「佐世保地区子どもドッジボール大会」は、少子化の影響で参加を断念した天神教会を除き、13小教区20チームで戦われた（写真）。

限られた人数で練習をしてきた小学生たちの頑張りもさることながら、信徒発見150周年ということもあってか応援来場者が多く、会場は熱気に包まれた。結果は次の通り。〈第1コート〉①鹿子前・船越 ②浅子 ③神崎C。〈第2コート〉①神崎B ②大崎A ③相浦A。〈第3コート〉①褥崎・大加勢 ②神崎A ③太田尾・間瀬。

宗教者懇話会が40周年

記念誌『平和への祈り』を発行

毎年8月8日に原爆落下中心地で原爆殉難者慰霊祭を主催するなど、平和に向けた活動を続ける長崎県宗教者懇話会（顧問 高見三明大司教、会長 野下千年師）が昨年11月に創立40周年を迎え、このほど記念誌『平和への祈り』を発行した。

記念誌には、キリスト教、仏教、神道の宗教者ら同懇話会の会員による寄稿文も掲載。1974年の創立以来、協力し理解を深め合って活動してきた同会の歩みが、写真と文、一般紙の記事などと共につづられている。野下師は、「本誌をご覧いただき、信者の皆さんが諸宗教対話運動への一層のご理解を深めていただければ幸いです」と語っている。

A4版、全248ページ。1冊2千円（税込）。購入希望者はカトリックセンター（TEL０９５・８４２・４４５０）野下まで。

みことばにふれて 120

江夏国彦神父（本原教会）

老いは恵み

「あなたたちは生まれた時から負われ、胎を出た時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで、白髪になるまで、背負って行こう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。」

（イザヤ46・3～4）

9月21日は敬老の日、日本は高齢化社会を迎えたと言われるようになって久しい。川柳に「住む世界　狭くなったら　老いはそこ」というのがあります。若いときと違って、活躍の場も交際の範囲も狭くなるものです。しかし、どんなに老いても、どのような環境に置かれても「愛し合う」という世界には、孤独や寂しさがありません。「アレだよ、で　通じる妻の　ありがたさ」という川柳は、長年愛し合ってきた夫婦の愛の年輪を感じさせます。

年老いて亡くなったある修道女の服のポケットに「老いは神さまの恵み」という散文詩が書かれた紙片が入っていました。

時として人々は口にしたくもない／まるで「老い」は恥ずかしいことで／隠しておきたいことかのように。／老いは恵みであることを忘れているのです。

やはり老いは恵みなのです。／与えられた長い年月に／恵みと愛のすばらしい宝を／私たちの人生に積みあげてくれるのですから。

この世で一日長く生きるなら／あなたをより良く愛せるでしょう。／私たちの父であるあなたを多くの恵みでご自分を知らせてくださるあなたを。

長い旅路のあとで、過ぎしこのかたを振り返る余裕が与えられ、／静けさのなかでじっと味わえます。／主よ、あなたへの旅路の意味を。／与えられる休息のときは招きます。／父よ、あなたを眺めることができますように。／明るく澄み切った自由な心とすべてから離脱した精神で。

私は老いを避けたくない。むしろ、歓迎したいのです。／巡ってくる日に、流れ行く日に、あなたの愛が注がれるから。

年月が経つにつれて過去がよみがえる。／もし愛に留まっているなら、死はもはや存在しない。／私は今、時間は人生を消しさる力がない、と感じている。／私は幸せです。とても幸せです。／年をとることが、これほど美しいものとは思いもよりませんでした。／また、わたしが人生のこの時期に／これほど幸せになれるなんて夢にも考えませんでした。

アンナ 鍋内恵子修道女

（お告げのマリア修道会）

7月14日、五島市の聖マリア病院で帰天。62歳。1953年五島市生まれ。67年福江修道院に入会、79年初誓願、84年終生誓願宣立。栄養士として聖マルコ園、希望の灯学園、聖マリアの園、聖マリア病院で奉仕した。

2011年に子宮がんの診断を受け、手術・治療によって小康を得たが、腎機能が低下し、透析を開始した。

穏やかで誠実な性格は死に至るまで変わることなく、体調がゆるすときは修道院で炊事を手伝い、文や行いで人々を励まし続けた。また、祈りを大切にし、良く通る声で神を賛美した。

葬儀ミサ・告別式は7月16日、いとこである鍋内正志師司式により福江教会で行われた。

ぶどう園

▼大村殉教祭　9月6日(日)13時、大村市民会館。

▼福者カミロ・コンスタンツォ殉教祭　9月20日(日)14時、田平町焼罪史跡公園。雨天時、田平教会。

▼公開聖書講座「出エジプト記 ―真の神に仕えるために―」　9月27日(日)13時～16時、カトリックセンター。講師・澤田豊成師（聖パウロ修道会）。前売券800円・当日券1000円。申込先・教区生涯養成委員会。TEL095・841・7731

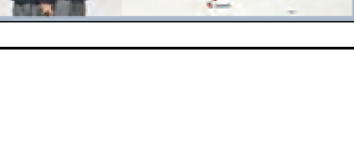
▼聖トマス西と十五殉教者ミサ　9月27日(日)14時、中町教会。

▼ホームレス支援講演会「いま、私たちが大切にしたいこと～釜ヶ崎で、共に生きて～」　10月3日(土)14時～16時、長崎原爆資料館。講師・本田哲郎師（フランシスコ会）。参加費無料。長崎ホームレスを支援する会主催。問合先・井手。TEL080・2714・8574

▼第137回クルシリヨ　10月9日(金)～12日(月)、イエズス会立山修道院。問合先・永山悦子。TEL095・879・3611

主の平安
カトリック式葬祭・飾付一式
（有）栄光式典社
代表取締役　ヨハネ　西村勇二
長崎市辻町7-18　TEL(095)844-4011
24時間営業　FAX(095)843-9896

精道三川台小学校（男子校）
本校はカトリックの教育理念に従って全人格的な成長を促し、本当の幸せを知り、味わい、そして周りの人々にその幸せを与えることのできる子供たちを育成します。
校訓：①自由と責任　②ポスムス（POSSUMUS）　③英雄的瞬間
児童募集中
〈学校公開週間〉9/16（水）～9/25（金）10:40～12:15 ※給食無料・要予約
〈学校説明会・公開授業〉9/27（日）9:35～11:15　予約不要
〈精道さるく〉（保護者ガイドが校内をご案内いたします。お気軽にご参加ください。）9/25（金）10:00～13:10　※要予約
〈お問合せ・資料請求〉〒852-8121 長崎市三川町1234-1 TEL.095-845-6846 http://www.seido.ed.jp/



白蟻調査無料・駆除予防工事5ケ年保証付
白蟻防除施工士
大田白蟻研究所
代表者　マリア　大島睦子
（〒850-0811）長崎市矢の平1丁目14番15号
☎長崎 095-822-8436
FAX 095-822-8488

石碑　文字彫刻　墓地工事　リフォーム　墓地分譲
長崎石彫（ながさきせきちょう）
ヨゼフ　岩永博明
☎(095)862-2469
長崎市梁川町6-17　岩永ビル

ハマチ・タイ養殖、アジ・イワシ加工、中型旋網
エテルナ・ワコー（株）
代表取締役　ミカエル　溝口晃
〒858-0926　佐世保市大潟町586
TEL(0956)47-4380